幼兒の教育

昭和十四年四月

迎へる心

教育者は、與へることの任務からか、どうも、迎へる心に缺け易い。來るなら來いであつたり、あゝ來たのかであつたり、更には、こつつかまへて押しつけることであつたりする。そして、先方が受けないと言つて、腹を立てたりする。それが、どうしても迎へる心一つで相手の前に出なければならぬのが、新入園の幼兒達を迎へる時である。こつちから期待し、要求し、註文するやうな、謂はゞこつちからの態度を一切封じて、ひたすら迎へる心になるのである。

迎へる心は、先方を主とする心である以上、ひとり〳〵をひとり〳〵とする心でもある。與へるには、集め揃へて置いて、蒔き與へ投げ與へることも出來る。迎へるにはひとりづゝ、ひとりびとりでなければならぬ。そうでなければ、少くも先方に於て、迎へられたと思へない。與へることは、相手を主にしながら、こつちが主になるところが多い。迎へることは、こつちが主であるやうで、迎へられてゐると思ふ先方の心が中心だからである。

迎へる心で一ぱいになり切つてゐる先生、それが四月の先生である。なんと、いつもの「先生」ばなれをしてゐることであらう。

（倉橋生）